
❖ 公 開 研 究 会 ❖

龍谷大学世界仏教文化研究センター公開研究会

「聖地研究の切り拓くもの」

2018 年 2 月 28 日 (水) 13:15～14:45

龍谷大学大宮学舎 清風館 B103



会場の様子
(龍谷大学大宮学舎 清風館 B103)

❖ 概 要 ❖

テ ー マ : 「聖地研究の切り拓くもの」

発 表 者 : 鎌田東二氏 (上智大学グリーンケア研究所副所長)

❖ 講 演 の 概 要 ❖

人間の象徴的思考

ネアンデルタール人は芸術家だったという記事が最近取り上げられた。複数の穴が空けられ、赤や黄色の顔料で彩色されているという独自の特色を持つ貝殻や、洞窟に描かれた動物と思われる絵だった。6万2千年前に描かれたこれらのものは、ネアンデルタール人が象徴を表現する力を持っていたということを示している。洞窟はかつての聖地の起源であり、一番古い洞窟はスペインのエルカスティヨ洞窟4万年以上である。そのはるか昔にネアンデルタール人(ホモサピエンスでない)が描いた絵は、人類の言語や葬儀など様々な起源を想像させる。ネアンデルタール人は葬儀をしていたと言われており、歌で会話していたとも言われる。言語をどれくらい持っていたかは分からないが、象徴的思考は持っていたのである。

聖地の起源

聖地の起源は洞窟ではないかと考える。また、聖地の本質とは、超越性・非日常性・超越の窓という点にあり、さらに聖地の未来には、新しい聖地・新宗教の聖地・21世紀の聖地という視点が出てくる。向こう側とこちら側とつないでくれるのが聖地であり、日常のなかに穿たれた穴が聖なる空間装置となる。ではなぜそうした装置を人類は必要としたのだろうか。人間が象徴的思考をしていくからにはこれからも聖地は生み出され、新しい聖地が生まれていく。

聖地の合理性

聖地は、神社と神話が結びついている場所がほとんどであり、さらに聖地には地形や儀礼が密接に結びついている。青島が陽の聖地だとしたら恐山は陰の世界であり、聖地は象徴化されているとは言え合理的な構造がある。聖地がある場所も、ハレーションを起こすような地形であったり、その空間そのものが我々の心身に変容をもたらすような土地だったりする。つまりそこが聖地と名づけられるだけの合理性がある。

聖地にまつわる神話には、世界の成り立ちや民族や国家の成立、われわれがこの世界（宇宙）の中で、なぜ、どのように存在するに至ったか、われわれはどこから来てどこに向かっているのか（宇宙・人類・文化）についての物語的説明と表現がある。また儀礼は神話に基づき、神話と連携しながら神や霊などの超越的な存在世界との接触を果たし、この世界で生きていく活力や癒しを得る身体技法と表現である。そして聖地は神話が語られ、儀礼が行なわれる場所である。聖なるものが示現し、立ち現れた場所であり、超越世界への孔・通路・回路・出入り口である。特殊な行為をするには特殊な場所が必要なのである。

聖地研究の方法論と宗教

聖地研究の方法論としては、人文的アプローチと科学的アプローチとがあり、人文的アプローチとしては、聖地神学、聖地宗教学、聖地心理学、聖地社会学、聖地人類学、聖地感覚論などが挙げられる。また、科学的アプローチとしては、聖地生態学、聖地物理学、聖地工学、聖地経済学、聖地マネジメント論がある。また、聖地研究を進化人類学的に行なうこともできるだろう。

宗教の三要素として神話、儀礼、聖地が挙げられ、宗教とは 無限なるものを認知する心の能力であり、聖地とは、聖なるものとの関係に基づくトランス（超越）技術の大系である。聖地となった場所は多くのエネルギーと情報を保持し、そこで意識変容が起こったり、心に靈感を与えてくれたりする。そこには物的特質もあり、聖地の多くが花崗岩の多い場所であることも注目できる。日本の聖地にも独特な地形空間が見られる。

聖地とは

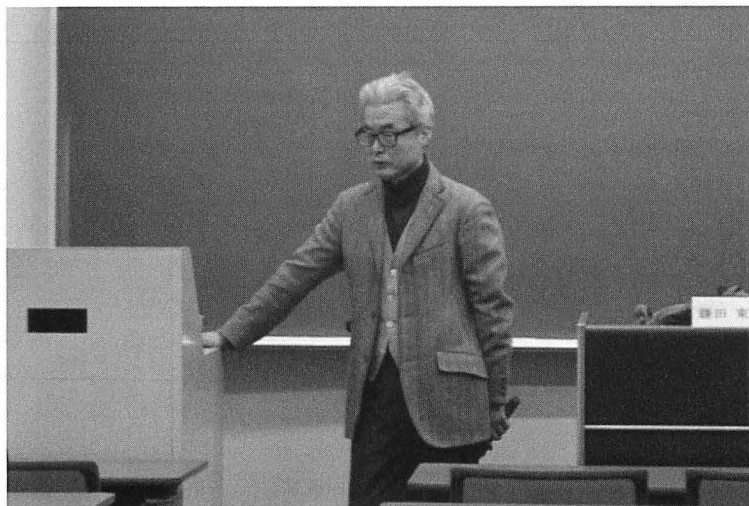
聖地の感覚は人間だけのものではなく、動物にもある。聖地とは安全を担保する場所でもあり、聖地を作ることは巣作りに繋がっている。多くの洞窟が聖地とされるのも、洞窟が危険から守ってくれる場所であったことに起源があるのではないだろうか。

動物の「巣作り」は、安全・安心空間の確保・担保と種の保存・維持・繁殖の可能性を増大させる手段であり、種の持続可能性を担保する空間を獲得できるかどうかという生存戦略である。ジェーン・グドールはチンパンジーが道具を用いることや肉食をすることを世界で初めて観察して衝撃を与えたイギリスの生物学者だが、彼女はアフリカ・タンザニアのゴンベにある美しい滝の前で、チンパンジーたちが不思議な行動をとることを発見した。ここに来ると、彼らは決まって不思議なふるまいをし、毛を逆立て、蔓を揺らし、何かに取り憑かれたように踊る。チンパンジーはすでにこの世の不思議に気づいており、われわれと同じように、何か大いなる存在の力に気づいている。もし彼らがその感覚を他者に伝える言葉を持っていたなら、きっと宗教の原点のようなものが生まれただろう。

❖ ま と め ❖

今回は、「聖地」を生み出し必要とした人類および人類文化を膨大な資料と事例に基づいて考察する充実した講座となった。聖地は生物が作る「巣」（休息・繁殖【出産・育児】・摂食・避難のできる安心空間）の人類史的発展形であり、人類に崇高、異世界・異次元、旅、冒険、救済、安心などの種々の超越をもたらした。聖地は人類の「生地」にして時のセクシュアルなものと密接に結びついた「性地」であり、そして時に政治的に利用され得る「政地」であるとされる。聖地を様々な角度で捉え直すことができ、各分野での聖地研究に接続できる視点が提示された講座となった。

【文責】 龍谷大学世界仏教文化研究センターリサーチ・アシスタント 大澤絢子



鎌田東二氏